

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 15 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008 年度 ～2011 年度

課題番号：20530600

研究課題名 (和文)

幼児期における映像の表象性理解の三段階発達モデルの精緻化とその検証

研究課題名 (英文)

Elaboration of the three stage model of younger children's understanding of representational nature of TV and photo images.

研究代表者：加藤 義信 (KATO YOSHINOBU)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：00036675

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：生涯発達・映像理解・幼児期・表象・テレビ・写真・幼児期の認知発達

1. 研究計画の概要

(1) 幼児期の子どもが、いつからテレビや写真などの映像を現実と区別できるようになり、それが映し (表象) であることをどのように理解するようになっていくかを実験的手法を用いて明らかにする。

(2) その際、従来の研究でみられたような、映像と現実との二分法的な区別の可否だけに焦点をあてるのではなく、映像が実在と混同される段階と映像が表象とはっきり理解される段階との間に中間的な段階を設定して、この段階の発達のゆらぎの実態を精緻に捉えることを、特に重要な研究課題とする。

(3) この「映像の表象性理解の三段階発達モデル」では、映像理解の発達を、シンボル (映像の図像的パターン)、シンボル媒体 (図像的パターンを生み出す物質的基体)、指示対象 (シンボルの指し示す現実の対象) の三者の関係理解の発達としてとらえ、中間段階を、シンボルと指示対象がはっきり分化しながらも、シンボル媒体についての認識が不十分であるためにこれが意識の後景に退き、シンボルと指示対象が一体となって前景化した状態と仮定する。この仮説的モデルから予想される幼児の、大人の目から見て不思議な映像理解のあり様を実験的に確かめることを通して、モデル自体のいっそうの精緻化を図ることが4年間の研究の到達目標である。

2. 研究の進捗状況

(1) 本研究第1年目 (平成20年度) には、表象性理解のモード (指示対象の有する特性

[機能、感覚的属性など] の違いによる表象性理解の難易) に焦点をあて、特に写真の property realism の理解という観点からの実験を行った。その結果、4歳児の多くは、写真が機能的には実在と異なることを十分認識しながら、感覚に訴える属性は共有していると思っている (写真のサポテンは触ったら痛い etc.) ことがわかった。4歳児は、まさに写真の表象性理解がモードによってゆらぐ中間的段階にあることを見出すことができた。

(2) この結果を踏まえて、2年目 (平成21年度) には、さらに property (属性) の種類を視覚的・聴覚的印象から「重さ」に拡張して実験を行った。その結果、4歳児に前年度の実験で見られたのと同様なタイプの反応が現れることがわかった。

(3) 3年目 (平成22年度) には、写真に写った対象の「重さ」の property に関する4歳児の捉え方をさらに詳しく調べるために、条件・手続きをより洗練させた実験を組織的に行った。

(4) なお、3年の間に、上記の property realism の存在を調べる実験と並行して、シンボル媒体の理解を促す手続き (カメラによる撮影と映像化の過程を子どもに見せる手続き) によって写真の表象性理解が促進されるか否かも調べたが、この点での十分な効果は得られなかった。また、試行的な実験としては、ビデオ映像に映る対象がヒトでその心的機能にかかわる reality が問題となる場合の理解について調べる実験も行い、新しい知見が得られる見通しが立った。

(5) 2年目までのこれらの結果は、いずれも日本心理学会、日本発達心理学会などで発表した。また、一部を論文化した。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

(理由)

研究代表者の加藤が研究計画年度の2年目と3年目(2009~2010年度)に学部長を務めることになり、エフォートのかなりを管理運営の仕事に割かざるをえなかった。そのため、2に示したように、実験的研究を着実に進め、結果を随時、学会で発表してきたが、それらを投稿論文に仕上げるペースに遅れがでている。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 実験は着実に行ってきたが、これらのデータを論文化する作業が遅れているので、投稿論文としてまとめる仕事を第一の課題とする。

(2) 論文化の作業にあたって、不足するデータを補うなどの補足実験が一部必要であり、実証的研究としてはこれを優先して行う。

(3) 研究期間内に得られた実験データからの知見を組み入れた「三段階発達モデル」の精緻化に向けての理論的作業を行い、レビュー論文としてまとめる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 工藤英美, 加藤義信, 写真の表象性理解の発達—映写メカニズムに接する機会が与えられた場合の効果—, 人間発達学研究, 第1号, 13-18, 2010年, 査読有
- ② 木村美奈子, 加藤義信, 小学校2年生児童のビデオ映像の表象性理解—理解の揺らぎを中心として—, 愛知県立大学文学部論集(児童教育学科編), 第56号, 35-52, 2008年, 査読無
- ③ 木村美奈子, ビデオ映像の表象性理解は幼児にとってなぜ困難か?: 写真理解と

の比較による検討. 発達心理学研究
第19巻, 第2号, 157-170, 2008年,
査読有

[学会発表] (計20件)

- ① Kimura, M., Kato, Y. & Seno, Y. What makes it difficult for young children to understand the symbolic nature of video images?: A comparative analysis of picture understanding. ISSBD 20th Biennial Meeting Programme & Abstracts, P.100, 2008年7月, (University of Würzburg, Germany).

[図書] (計4件)

- ① 加藤義信, 新曜社, 情動と時間, 子安増生・白井利明(責任編集) 発達科学ハンドブック3: 時間と人間(所収), 2011年, P.223-240

[その他] (計4件)

- ① 加藤義信, 幼児における映像世界の表象性理解に関する発達の研究: 平成17年度~平成19年度科学研究費補助金(萌芽研究) 成果報告書(課題番号17653090), 2008年, 全56ページ